

# JAにいがた岩船が取り組む 「ザルビオ<sup>®</sup>フィールドマネージャー」による JA営農指導DX(実践編)

今回は、11月号 (No.653) の「導入編」に続き「実践編」として、JAにいがた岩船での「ザルビオ<sup>®</sup>フィールドマネージャー」(以下、ザルビオ)によるJA営農指導DX\*について、導入後の取り組みと次年度のチャレンジを紹介します。

\*:ザルビオを活用した営農指導の効率化。

## 導入後の取り組み

ザルビオの導入決定後、JAは管内の水稻生産者(約1,200名)から営農計画書データ利用承諾書を提出いただき、管内9割以上(約4,400ha)の圃場の水稻作付データを営農管理システム「Z-GIS」に読み込ませ、ザルビオへデータ連携させることで効率的な作業が可能となりました(表1)。

表1 ザルビオ導入後の取り組み内容

時期	実施内容
2023年4月	圃場登録および生産者への許諾対応
2023年5~7月	生育調査(実測値とザルビオデータの相関性確認)
2023年7~8月	生育マップを活用した穂肥指導
2023年11月	生産者向けザルビオ研修会(ザルビオ連携可能農機の展示など)
2023年12月~2月	地力マップ(代表圃場)の配布および次作に向けた施肥設計指導

その後、JAはザルビオを活用した営農指導に着手しました(写真1)。例年5月下旬から7月下旬にかけて10日ごとに実施する約50カ所の生育調査の実測値とザルビオの生育ステージ予測機能との相関が高いこと、そして生育ステージを表すBBCHの精度が非常に高いことを確認しました。これにより、各地区の指導会などで生産者に圃場ごとの適切な追肥時期や防除時期を情報提供することが可能となり、



写真1 ザルビオを使った営農指導の様子

生産者からも「圃場の“見える化”ができてわかりやすい」と好評を得ています。

また、ザルビオの生育マップから圃場の生育ムラを確認し、そのマップをもとにしたドローンの可変追肥(手動)を試験的に実施したところ、生育ムラが解消されて2022年より20%ほど収量が向上した事例もありました(図1)。さらに、現地でザルビオを活用した指導を行うため、若手営農指導員に端末を貸与したことでモチベーションが向上し、積極的に生産者を訪問して提案するようになりました。

11月には担い手を対象に、ザルビオの活用事例講演と連携可能なスマート農機の展示・紹介の利用セミナーを開催しました。また、実際に可変施肥に取り組んだ生産者がその結果を説明したところ、ザルビオに興味を持つ若手生産者が数多くみられ、JAの営農指導DXの取り組みを広く周知することができました。

## 次年度のチャレンジ

JAの営農経済事業を向上させる取り組みとして、圃場登録に承諾した生産者を対象に、代表圃場の地力マップを活用した地力ムラを改善する施肥設計の提案・指導を計画しています。また、既存のドローン所有者やスマート農機に興味のある生産者を中心に、ドローンを使った可変追肥を積極的に推進する予定です。そのほかに、生育ステージのBBCHを活用した中干し指導や追肥指導、防除、収穫時期といった情報を提供することで営農指導の効率化を進めていきます。

JAにいがた岩船は、ザルビオ導入3~4年後の姿として、大規模生産者・法人組織などの多くが自らザルビオを導入してリモートでの営農指導に変わっていく一方、スマートフォンやパソコンが使えない高齢者には、JAが一括導入したザルビオを活用してサポートしていくことをめざしています。

【全農 耕種総合対策部 スマート農業推進課】

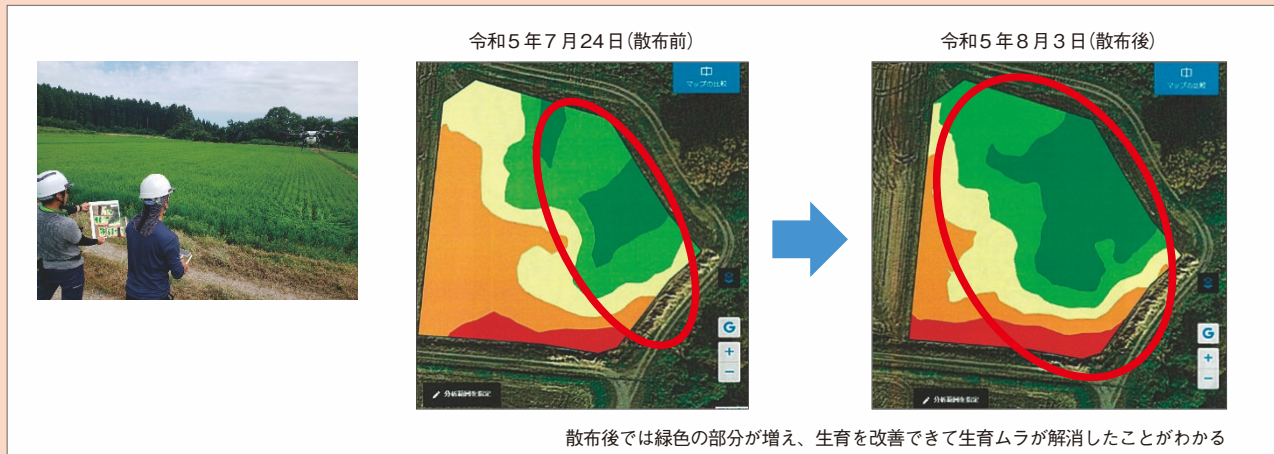


図1 ドローンでの可変追肥による生育ムラの解消